

弁証法神学におけるルター研究

—— 弁証的研究の再開と歴史的視点の後退 ——

村 上 み か

1. はじめに

プロテスタント教会形成の基礎を築いたルターとその宗教改革は、当初よりプロテスタント神学の歴史の中で特別な位置を与えられ、長きにわたって教条的、弁証的観点からなされる理解が提出されてきた¹。近代に入り、信仰の自由の保障や政教分離の原則を通じてキリスト教がその政治的基盤を失った後も、ルターに対する高い評価は変わらず、むしろ近代の様々な思想潮流が、それぞれの視点からルターを再解釈し、改めて英雄としてのルター理解が提出されるに至った。そのような中で19世紀後半、本格的なルター研究、また宗教改革研究が自由主義神学によって始められることになる。アルブレヒト・リッチェル、アドルフ・フォン・ハルナック、エルンスト・トレルチらはその歴史意識と方法をもって、ルターや宗教改革を歴史的文脈の中に理解することを試み、それらが中世的、カトリシズム的要素をもつ存在であることを明らかにした。このことにより、彼らはこれまでの理

¹ これについては、以下の拙論を参照：「神学領域における宗教改革研究—その歴史的視点の欠如—」（森田安一編『ヨーロッパ宗教改革の連携と断絶』教文館2009年5月、307-323頁）

解に対して、ルターや宗教改革を批判的に考察し、歴史的に相対化する視点を提出したのである。しかし彼らの研究においては、その近代的な問題意識が解釈の中に入り込み、その結果、最終的には「近代化」されたルター理解が提出され、徹底した歴史的考察を提出することが出来なかった²。そしてまさにその近代性を克服すべく現れてきた弁証法神学によって、彼らの研究は退けられ、それに代わる新たな考察、すなわち、弁証法神学の視点からする宗教改革やルターの研究が提出されることになったのである。この「弁証法神学的ルター研究」は、その後、数十年にわたりルター研究を支配し、ここに自由主義神学がもたらした歴史的、批判的視点は後退し、再び「弁証的」ルター研究が復活したのである。

本論文は、この弁証法神学におけるルター研究について考察を行う。すなわち、まずカール・バルト (Karl Barth) のルター研究、さらにそれに続く弁証法神学のルター研究の展開を取り上げ、ルター研究史におけるそれらの位置付けを明らかにしたいと思う。

2. カール・バルト：宗教改革の神学遺産の発見

(1) 宗教改革神学への方向転換

バルトはその神学活動において、ルターやその神学について、まとまった研究を提出したわけではない。しかし、一連の論文と『教会教義学』において明確なルター理解を提出し、これにより、その後のル

² これについては、以下の拙論を参照：「自由主義神学におけるルター研究—歴史的考察の始まりとその限界—」（『教会と神学』第51号、2010年11月、35-59頁）

ター研究が大きく展開する契機を与えることになった。

バルトの宗教改革に対する取り組みは1920年代、政治的、神学的に危機的な状況の下に始まり、彼自身の神学形成と連動する形で展開されたものであった。すなわち、彼自身の神学的な模索が始められる中、彼は聖書と取り組む傍らで宗教改革者、とくにルターとカルヴァンの神学に向かい、その研究に着手したのである。1919年の『ロマ書講解』に続き、彼は1921年にゲッティンゲン大学へ招聘されるが、その二学期目にあたる1922年夏学期に、バルトはカルヴァンの神学についての講義を行い、1923年にはルターについての論文を著している³。そして彼らの神学と取り組む中で、彼は宗教改革の神学的遺産の意義を改めて認識することになる。すなわち、罪人の義認と救い、信仰、悔い改めや業、教会の本質や限界といった問題について宗教改革の神学を理解する中で、バルトは自身が置かれていた当時の教会状況の中でこれらの神学を全く新しいものとして受取り、重要な使信と受け止めた⁴。そして彼はここに新しい神学への指針を見出し、「宗教改革の路線へ」⁵と大きな方向転換を始めたのである。この宗教改革の遺産の発見はまた、バルトに宗教改革と近代のプロテスタンティズム

³ Barth, Karl, *Ansatz und Absicht in Luthers Abendmahlslehre*, in: *Zwischen den Zeiten*, Nr.4, München 1923, S.26-75. この時期、1922年から翌年にかけての冬学期にバルトはツヴィングリとも取り組むが、それは彼を失望に終わらせるものであったと言う。この時期のバルトの取り組みについては: Busch, Eberhard, *Karl Barths Lebenslauf*, München 1975, S.155f.

⁴ Ebd., S.156.

『ロマ書講解』に続くこの大きな変化の時期に、バルトはすでにルターの霊的、言語的能力に感銘を受けているが、まだこの時期にはルター神学との本格的な取り組みには至っていない。Ebeling, Gerhard, *Karl Barths Ringen mit Luther*, in: ders., *Lutherstudien*, Bd.III, Tübingen 1985, S.428-573, ここでは S.531.

⁵ Busch, Karl Barths Lebenslauf, S.156.

の相違を認識させるに至り、同時に彼は近代プロテスタント神学の研究をも始めることになる。そして聖書研究とこの宗教改革神学への取り組みのプロセスを経て、バルトは彼独自の神学、すなわち「神の言葉の神学」また「弁証法神学」と名づけられるところの神学を形成するに至ったのである⁶。宗教改革の神学は彼の新しい神学の歩みを基礎付ける重要な意味をもつものであったことが理解されるだろう。もっとも彼の宗教改革の神学に対する取り組みは、まだこの時点ではその端緒が開かれたばかりで、本格的なものではなかった。

(2) 宗教改革神学の位置づけ

周知のように、彼の提出したこの新しい神学は、1930年代の先鋭化された時代状況の中で大きな反響を呼び、第一次大戦後の教会の革新に神学的基礎を与えるものとなった。そしてこの時期、ルター記念祭、カルヴァン記念祭が続いたことにも促され、バルトは新たに宗教改革に関する一連の論文を著した。すなわち「決断としての宗教改革 (Reformation als Entscheidung)」(1933年)「ルター記念祭 1933年 (Lutherfeier 1933)」(1933年)「カルヴァン (Calvin)」(1936)⁷「カルヴァン記念祭 1936年 (Calvinfeier 1936)」(1936年)である。これらの論文において、バルトは宗教改革に対する理解をより深められた形で提

⁶ ザーフェンヴィルでの聖書研究とゲッティンゲンでの宗教改革神学との取り組みが結びつき、彼独自の神学が形成されたと理解されている。1922年にはすでに「弁証法神学」の名称が彼に与えられていた。Busch, Karl Barths Lebenslauf, S.151, 155-157; Ebeling, Karl Barths Ringen mit Luther, S.428, 443-445, 531.

⁷ Barth, Reformation als Entscheidung, (Theologische Existenz heute, Heft 3.), München 1933.; Lutherfeier 1933 (Theologische Existenz heute, Heft 4.), München 1933.; Calvin (Theologische Existenz heute, Heft 37.), München 1936.; Calvinfeier 1936 (Theologische Existenz heute, Heft 43.), München 1936.

出すことになった。

この四論文はいずれも *Theologische Existenz heute* に載せられたものであり、とくに宗教改革とルターに関する最初の二論文は 1933 年に出され、当時の教会状況を直接反映させる形で、考察が進められている。すなわち帝国教会の体制と「ドイツキリスト者」の台頭を前にして、バルトはこのドイツ福音主義教会の状況を危機と捉え、それに対して抵抗を行う切迫した状況の中で、いったい何が福音主義教会の基礎であるのかと問い、宗教改革神学との取り組みを進めた。そして宗教改革の神学が現在の福音主義教会に何を示し、何をもたらしうるのかと、改めて問い直していったのである⁸。

その際、バルトはまず、近代に提出された宗教改革理解はいずれも、この問いに対する説得力ある答えを出していないとして、これらを退けた。すなわち様々な思想潮流やトレルチらが行ったように、宗教改革の文化的、政治的、国家的な意義を強調し、あるいは英雄としてのルターを前面に出す理解は、福音主義教会の基礎を理解する上で、十分でないというのである⁹。そしてバルトは事柄に即して宗教改革を理解することを試み、その結果、宗教改革は「真のキリスト教会の再建」¹⁰としての意義をもつものであったとする理解を提出したのである。なぜなら、そこには何よりも「教会において忘れられた、あるいはほとんど忘れられたキリスト教の真理を再び言い表し」¹¹、「預言者や使徒

⁸ Barth, *Reformation als Entscheidung*, Vorwort S.3f. ; *Lutherfeier 1933*, Vorwort S.3-7.

⁹ Barth, *Reformation als Entscheidung*, S.5-7. ; *Lutherfeier 1933*, S.11f.

¹⁰ Ders., *Reformation als Entscheidung*, S.10.

¹¹ Ebd., S.7.

の教えと同じく極めて確かなもの」¹²を有するという神学的な意義が認められると理解したからである。その内容は、ルターにおいて完結した形で語られた言葉、すなわち「キリスト」「福音」あるいは「神の言葉」を中心に据えて語られた言葉であり、具体的にそれは、聖書の尊厳と権威、創造主の栄光、罪人の和解者としてのイエス・キリスト、キリストへの信仰の力、この世におけるキリスト者の自由、また真の教会の謙虚さと勇気の必要性として表現されたものである¹³。宗教改革においては、これらの「キリスト教の真理の純粋な教理」¹⁴が第一に問題であったのであり、この真理への立ち返りによって、異端に陥っていた教会は自己自身へと戻り、真の教会を再建する結果をもたらした¹⁵。これが宗教改革の、そして福音主義教会の本質であったと、バルトは理解する。

そしてこの真理への立ち返りによりローマ教会と対立してゆく宗教改革の中に、神への信仰を告白し、そのことにより誤った教会に抵抗を行ってゆく「決断」の状況を、バルトは見取った¹⁶。すなわち、宗教改革の神学の中に示されているものは、単なる思索ではなく、それは告知し、宣言し、論争するものであることをバルトは理解したのである。そしてそれは、神に対する人間の究極的な決断であることを、バルトは宗教改革の神学から導き出したのである¹⁷。

こうしてバルトは新プロテスタンティズムに対して、また「ドイ

¹² Ebd., S.9.

¹³ Ebd., S.7 ; ders., Lutherfeier 1933, S.8.

¹⁴ Ders., Reformation als Entscheidung, S.8.

¹⁵ Ebd., S.7-10.

¹⁶ Ebd., S.10f.

¹⁷ Ebd., S.11-17.

ツキリスト者」の運動に対して、激しく対立し、抵抗してゆく契機を宗教改革神学から得たのである。彼は、宗教改革に連なるこれらのプロテスタンティズムが文化的、政治的、国家的様相をもって現れ、宗教改革の提出した教会的、神学的基礎を失ったことを問題とした¹⁸。すなわち、そこには人間が中心に立ち、信仰を道徳や理性、人間性や文化、そして民族や国家との関係において語ろうとする教会の姿があり、この「偽りの福音主義教会」¹⁹に対して抵抗し、イデオロギーから離れ、原点の真理に回帰することを、バルトは強く主張していったのである²⁰。

このように、バルトは帝国教会やドイツキリスト者に抵抗して行く差し迫った状況の中で、宗教改革の、とりわけルターの神学と取り組み、ここにプロテスタンティズムの回帰すべき原点を見る宗教改革理解を提出した。そしてこのことは、彼のその後の運動の支えとなり、その展開を方向付ける大きな教会史的、神学史的意義をもつものとなる。しかし、宗教改革に規範的意義を帰するこの姿勢は、宗教改革研究史においては、正統主義以来の弁証的理解の復活と捉えられるものであり、この基本姿勢が彼のその後の宗教改革神学との取り組み、さらには弁証法神学における宗教改革神学研究の展開を規定することになるのである。

(3) ルター神学との取り組み

このように回帰すべき原点としての宗教改革理解を基本姿勢とし

¹⁸ Ebd., S.17-24.; ders., Lutherfeier 1933, S.17-21.

¹⁹ Ders., Reformation als Entscheidung, S.23.

²⁰ Ebd., S.6f., 10-19, 23f.; ders., Lutherfeier 1933, S.6,8.

て、バルトはこの時期、カルヴァンと並んでルターの神学に対する集中的な取り組みを始め、彼の神学を深化させていった。その成果は彼の『教会教義学』（1932-67年）の中に現れることになる。その際、その取り組みの仕方そのものが、彼のこの基本姿勢を如実に反映したものであった。すなわち、バルトのルターへの依拠はとくにその1巻（Prolegomena）、すなわち彼の神学の基礎を論じる部分に集中している。そして、個々のテーマについて論じる際、バルトは繰り返しルターを引き合いに出し、ルターとの対話において、彼自身の神学を展開させていくというあり方が取られているのである。そして彼が依拠しようとしたテーマも、彼自身の問題意識を反映したものであった。すなわちそれは、ルターが福音宣教を教会の中心的課題としたこと²¹、あるいは教義学の基準としての神の言葉の意義²²、賜物としての信仰理解²³、また信仰義認論の中心的意義²⁴であり、さらにルターがそれらを守るために思弁や弁証を退けた²⁵ことであった。その取り扱い方も、ルター自身の語りを客観的に聞くというよりも、バルトの置かれた時と場において、ルターを語らせる意図をもってなされたと理解されるものである。これらの部分では、批判的な調子は見られず、全面的な依拠の姿勢をもってルターの言葉が現在化されているのである。

もっとも、バルトはルター神学すべてを規範として単純に受容したわけではなく、それに対する批判をも展開し、繰り返しその限界を

²¹ Barth, Kirchliche Dogmatik I-1, München 1932, S.18, 30, 71f.,92, 98.

²² Ebd., S.156f.

²³ Ebd., S.142, 148f., 156f., 161, 259.

²⁴ Ebd., IV-1, Zollikon-Zürich, 1953, S.579f.

²⁵ Ebd., I-1, S.18, 30.

指摘している。とりわけ「隠された神」と「啓示された神」を区別する理解は、神の統一性を破壊する危険があると批判の対象とされた²⁶。またキリスト論についても、それがキリストの両性論をもって人間的なものを神化し、神と人間の関係の不可逆性を相対化する危険をもつことを指摘している²⁷。人間的なものとの緊張関係を強調する彼の理解が、キリスト論において明確化、徹底化された形で表れたと言えるだろう。さらに、バルトはルターにおける律法と福音の並列性を批判し、律法に対する福音の優位性を強調している²⁸。ここにおいても、ルターとの対話の中でバルトの神学がより厳密な形で展開されてゆくプロセスが伺えるだろう。

『教会教義学』に見られるこのような取り組みから、ルターほどバルト神学全体に対して—それが肯定的な受容であれ、否定的な批判であれ—影響を与えた神学者はおらず、ルターは聖書に次いで極めて重要な神学的対話のパートナーであったと位置づけられるほどである²⁹。このように、バルトのルター研究は彼自身の神学形成を基礎づけるものとして提出され、独立した「ルター研究」として提出されたものではなかった。しかし、まさに彼のその神学を基礎付けたルター

²⁶ Ebd., II-2, Zollikon-Zürich 1942, S.71.

²⁷ Ebd. IV-2, (Zollikon-Zürich 1955), S.89-91.

²⁸ 福音と律法について Ebd, II-1 (Zollikon 1940), S.407.

バルトのルター解釈については、以下の文献を参照：Ebeling, Karl Barths Ringen mit Luther, S.454-459, 492f., 517f., 551f.; Bornkamm, Luther im Spiegel, S.120-123; Lohse, Martin Luther, S.237f.

²⁹ Ebeling, Karl Barths Ringen mit Luther, S.530-533.

エーベリンクはその精緻な研究によって以下のことを確認した。すなわち、バルト神学の形成に対するルターの影響が大きいとしても、それはルターの個々の神学的見解に対する合意よりも、ルターの霊的な卓越性への感銘というべきものであったということである。(Ebeling, Karl Barths Ringen mit Luther, S.533.)

そのものの研究が、彼に続く弁証法神学運動の中で提出されることになる。すなわち、新プロテスタンティズムへの否定的態度と宗教改革神学への回帰の志向の中で、ルター研究が大変な勢いをもって展開されたのである。そして、これまで述べてきたバルトの態度と同じく、それは基本的にルター神学に集中し、そこから現在における使信を読み取ろうとする組織神学的研究であった。ここに自由主義神学以来、ホルに至るまで努力されてきた歴史的考察は後退するのである。

もっとも、このような新しい研究の傾向はバルトの啓示理解とそれに対応する歴史理解にも関連していることが指摘されるべきだろう。すなわち彼は永遠に不変なるもの (ein Ewig-Gleiches) への大いなる関心のために、歴史的な存在とその歴史的連関に対して積極的な関心を示さなかったのである。その結果、「教会史」を教義学の「補助学 (Hilfswissenschaft)」と位置づける彼の理解が提出されることになる³⁰。このような基本的な理解をもって、彼はまさに新プロテスタンティズムを否定したのであり、近代神学における歴史意識を批判したのであった。そしてこの近代的なものを代表するものとしてバルトがとりわけ厳しく異議を唱えたのが、トレルチであり、彼の宗教改革理解であったのである³¹。

このようなわけで、それに続く数十年の間、ルター研究における歴史研究は決定的に後退する。これが、「近代神学の克服」の努力がルター

³⁰ Barth, Kirchliche Dogmatik, I-1, S.3.

³¹ Groll, Wilfried Ernst Troeltsch und Karl Barth, München 1976, S.12f. (西谷幸介訳『トレルチとバルト—対立における連続—』教文館 1991年 13-14頁)

研究にもたらした結果であった³²。

3. 弁証法神学におけるルター研究：

ルター神学への集中とその弁証的姿勢

前述のように、新プロテスタンティズムへの否定的態度と宗教改革神学への回帰の志向の中で、弁証法神学は数十年にわたって、ルターの「神学」との集中的な取り組みを展開した。そしてそれは1960年代に至るまで、ルター研究全体に大きな影響を及ぼし、支配的な潮流としての位置をもつものとなる³³。

³² Ebeling, Die Bedeutung der historisch-kritischen Methode für die protestantischen Theologie und Kirche, ZThK 47, 1950, S.1-46, ここでは S.1f.

³³ もっともルター神学への集中の傾向は、ホルのルター研究とルター・ルネサンス以来にも見られる現象であり、この傾向はさらにホルの弟子たちやルター・ルネサンス以来の研究者たちによって促進された。前者はすなわちハインリヒ・ボルンカム (Heinrich Bornkamm) やハンス・リュッケルト (Hans Rückert), エマヌエル・ヒルシュ (Emanuel Hirsch), そして一定の距離があるがパウル・アルトハウス (Paul Althaus) であり、後者はヴァルター・レーヴェニヒ (Walther von Loewenich), ルドルフ・ヘルマン (Rudolf Hermann) といった研究者たちである。彼らはその研究において、1920年代に提出された新しい視点、すなわちホルの示したルターの思考における神中心的志向という問題をさらに展開させ、場合によっては修正しつつ、深めていった。同様に、義認の経験をルター理解の出発点とする視点やルターの宗教を良心の宗教とする視点もさらに探求された。このようにして、彼らは徹底した研究の成果を上げ、それによって第二次大戦後の研究にも大きな刺激を与えるものとなった。その際、特に彼らの歴史的関心が重要な役割を果たし、1960年代以降、急速に展開された「歴史的」ルター研究に大きな貢献をなすことになる。しかし、彼らの影響は、当時は弁証法神学の背後に大きく退き、さらに1933年以後にホルの弟子たちの中に見られた政治的な態度のために、あるいは1960年以降の世代交代のために、限定されたものとなったのである。この時期の研究動向については以下の論文を参照：Loewenich, Wandlungen des Lutherbildes im 19. und 20. Jahrhundert, S.66-68, 73; ders., Probleme der Lutherforschung und der Lutherinterpretation, S.16f., 19f.; Lohse, Bernhard, Die Fronten geraten in Bewegung, LM 16, 1977, S.712-714, ここでは S.712f.; Müller, Gerhard, Protestantische Lutherforschung der Gegenwart, in: Der evangelische Erzieher 18, 1966, S.252-269, ここでは S.252; Lau, Der Stand der Lutherforschung heute, S.39f., 43f.

その際、バルト以来の宗教改革に対する基本姿勢が、弁証法神学のルター研究の展開を規定するものとなった。このことは、ここで取り上げられたルター神学のテーマそのものが示唆している。すなわち「隠された神」「予定説」「奴隷意志」「十字架の神学」「宗教への批判」についてのルターの理解が探求されたのであり、これらの研究は「獲得された神学的立場（すなわち弁証法神学：傍注筆者）の拡張であり、深化であり、あるいは正当化」³⁴に他ならなかったと理解されるものである。このことは、以下に見てゆく中で理解されることだろう。このような姿勢は、特にゲオルク・メルツ（Georg Merz）やエルンスト・ヴォルフ（Ernst Wolf）、ハンス・ヨアヒム・イーヴァント（Hans Joachim Iwand）に、そしてとくに初期バルトの影響下にあったフリードリヒ・ゴーガルテン（Friedrich Gogarten）に明らかな形で見られた³⁵。そして彼らほどではないにせよ、多少なりとも弁証法神学の影響を受けた研究者たちも同様の傾向を示している。すなわち、彼らの関心は、バルトと同様、ルターが彼の置かれた歴史状況の中で何を語ったかという客観的な考察よりも、ルターが今、自分たちに何を語るか

³⁴ Loewenich, Walther von, *Die Lutherforschung in Deutschland seit dem zweiten Weltkrieg*, ThLZ 81, 1956, S.705-716, ここでは S.706.

³⁵ Loewenich, *Die Lutherforschung in Deutschland seit dem Zweiten Weltkrieg*, S.705f.,710.; ders., *Das Lutherbild in der gegenwärtigen Lutherforschung*, in: *Der evangelische Erzieher* 9, 1957, S.261-266, ここでは S.263f.; ders., *Lutherforschung in Deutschland*, in: Vilmos Vajta (Hrsg.), *Lutherforschung heute*, Berlin 1958, S.150-171, ここでは S.150f.; ders., *Wandlungen des evangelischen Lutherbildes im 19. und 20.Jahrhundert*, in: Erwin Iserloh usw., *Wandlungen des Lutherbildes*, Würzburg 1966, S.49-76, ここでは S.68-70.; ders., *Probleme der Lutherforschung und der Lutherinterpretation* (Bayerische Akademie der Wissenschaften, Philosophische-historische Klasse, 1984, Heft 1), München 1984, S.18,20; Lau, Franz, *Der Stand der Lutherforschung heute*, in: Ernst Kähler (Hrsg.), *Reformation 1517-1967*, Berlin 1968, S.35-63, ここでは S.40; Müller, Gerhard, *Neuere Literatur zur Reformationsgeschichte*, ThR 42, 1977, S.93-130, ここでは S.93.

というルターの現在化にあったのである³⁶。

以下、この時期に提出されたルター研究を概観し、その動向とこれらの研究のもたらした問題を明らかにしたいと思う³⁷。

彼らの研究の中で何よりも多く提出されたのは、ルター神学の思考の総体、あるいはその中心に関する考察であった。その際、特徴的なのは、たいていの研究がルターの神学を信仰義認論から理解しようとしているということ、そしてそれぞれが、その程度の差はあれ、弁証法神学の影響の下に、そしてホルの影響をも受けつつ、様々なニュアンスをもって理解しているということである。たとえばゲオルク・メルツは、ルターの「隠された神 (deus absconditus)」の理解をルターの神学発言の中心と捉え、そこからルターの「奴隷意志 (servum arbitrium)」論をこの「隠された神」理解に対応するものと結論した³⁸。またエルンスト・ヴォルフはルターの神学を厳密な、また排他的な意味において「神の言葉の神学」と捉え、彼の神学の中に自然神学への徹底的な否定的態度があると結論した³⁹。あるいはヴァルター・レーヴェニヒ (Walther Loewenich) は十字架の神学 (theologia

³⁶ ブッシュは、とくにメルツやゴーガルテンを初めとする弁証法神学者たちが、このような基本姿勢をもって、ルター神学の研究を展開していった様子を、精緻な分析を通して明らかにした：Busch, Eberhard, Die Lutherforschung in der dialektischen Theologie, in: Vinke, Rainer (hrsg.), Lutherforschung im 20. Jahrhundert. Rückblick-Bilanz-Ausblick, Mainz 2004, S.51-69.

³⁷ この時期のルター研究の動向については、以下の論文を参照：Loewenich, Die Lutherforschung in Deutschland seit dem Zweiten Weltkrieg, S.710-712; ders., Lutherforschung in Deutschland, S.155-157; ders., Zehn Jahre Lutherforschung in Deutschland, S.343-352.

³⁸ Merz, Georg, Der vorreformatorische Luther, 1926; ders., Zur Frage nach dem rechten Lutherverständnis, 1928.

³⁹ Wolf, Ernst, Peregrinatio. Studien zur reformatorischen Theologie und zum Kirchenproblem, 1954

crucis) をルター神学全体の印とし、その意義を強調した。すなわち、義認はキリストの十字架の寓喩解釈であると理解し、両者の密接な関係を主張したのである⁴⁰。信仰義認論そのものに関しては、ルドルフ・ヘルマン (Rudolf Hermann) らによって罪と義認の問題が深く探求された⁴¹。そして信仰義認論がルター神学の中心にあるとする理解から、心理学的、哲学的解釈が退けられ (ヴィルヘルム・リンク Wilhelm Link)⁴²、また特定のルター神学を追求することが否定されるという結論が導き出されることになった (ハンス・ヨアヒム・イーヴァント)⁴³。

その一方、ルター神学の基礎にあるのは信仰義認論ではなく、古代教会のキリスト論であり、したがって信仰義認論はその展開にすぎないとする理解が、ヴィルヘルム・マウラー (Wilhelm Maurer) によって提出された⁴⁴。すなわち信仰義認論はルター神学の根源ではなく、三位一体論とキリスト論を新しく解釈することにより生まれた最終的

⁴⁰ Loewenich, *Luthers Theologia crucis*, ¹1929, Neuausgabe 1954; ders., *Luthers evangelische Botschaft*, ²1948

⁴¹ Hermann, Rudolf, *Gottesgerechtigkeit und unsere Rechtfertigung* (1925), in: *Gesammelte und nachgelassene Werke II*, 1981, S.43-54; ders., *Rechtfertigung und Gebet* (1925), in: *Gesammelte und nachgelassene Werke II*, S.55-87; ders., *Beobachtungen zu Luthers Rechtfertigungslehre* (1929), in: *Gesammelte Studien zur Theologie Luthers und der Reformation*, 1960, S.77-89; ders., *Luthers These "Gerecht und Sünder gleich"* 1930; ders., *Zur Frage: Vorsehungs- und Heilsglaube bei Martin Luther*, ZST 16, 1939, S.189-232; ders., *Luthers Rechtfertigungslehre und ihre Bedeutung für unsere Zeit*, ZST 21, 1950/52, S.267-292; ders., *Zu Luthers Lehre von Sünde und Rechtfertigung*, 1952.

⁴² Link, Wilhelm, *Das Ringen Luthers um die Freiheit der Theologie von der Philosophie (Forschungen zur Geschichte und Lehre des Protestantismus, 9.Reihe, Bd.III)*, 1940.

⁴³ Iwand, Hans Joachim, *Glaubensgerechtigkeit nach Luthers Lehre. Theol. Existenz heute*, Heft 75, 1941.

⁴⁴ Maurer, Wilhelm, *Die Einheit der Theologie Luthers*, ThLZ 75, 1950, S.245-252.; ders., *Die Anfänge von Luthers Theologie. Eine Frage an die lutherische Kirche*, ThLZ 77, 1952, S.1-12.

な結論であるとし、十字架の神学も受肉の神学の結論であるとしたのである。またフリードリヒ・ゴーガルテンは、ルターがその信仰の非世俗化（*Entweltlichung*）と世界の世俗化（*Verweltlichung*）をもって中世や近代に対立したことを指摘し、いずれにも属さない独自の位置を占めるものであることを強調した⁴⁵。それに対し、ホルの弟子の側からルターの敬虔性を良心の宗教（*Gewissensreligion*）とする理解が提出されたことも、指摘しておこう（エマヌエル・ヒルシュ *Emanuel Hirsch*）⁴⁶。

もっとも、この時期、何よりも集中的に研究されたのは、1519年頃までのルターの初期神学であった⁴⁷。初期ルターの神学の解釈はホル以来、重要な問題であったが、ルターの初期の聖書釈義が出版され⁴⁸、それらとの取り組みを通して、ルター神学の形成についての研究が始められたのである。これらの研究は、特にホルの弟子であるハインリヒ・ボルンカムらによって進められるが、彼らの研究はルター

⁴⁵ Gogarten, Friedrich, *Die Verkündigung Jesu Christi. Grundlagen und Aufgabe*, とくに III. Luther, S.275-402, 1948; ders., *Sittlichkeit und Glaube in Luthers Schrift De servo arbitrio*. ZThK 47, 1950, S.227-275.; ders., *Der Mensch zwischen Gott und Welt*, とくに S.88-128. 1952.

⁴⁶ Hirsch, Emanuel; *Lutherstudien Bd.I*, 1954.

⁴⁷ この時期のルターの初期神学の研究の研究については、以下の論文を参照：Müller, Gerhard, *Neuere Literatur zur Theologie des jungen Luther*, in: *Kerygma und Dogma* 1965, S.325-357, ここでは S.341-348; ders., *Protestantische Lutherforschung der Gegenwart*, S.262; Lau, Franz, *Lutherforschung*, LM 5, 1966, S.512-519, ここでは S.513; zur Mühlen, Karl-Heinz, *Zur Erforschung des "jungen Luther" seit 1876*, Luj 50, 1983, S.48-125, ここでは S.56-60,86-89.

⁴⁸ Eine Neuedition der I.Psalmenvorlesung, traditionsgeschichtlich verarbeitet, WA 55 I (Glossen), WA 55 II (Scholien), 1963 (vgl. WA 55 II, WA55 III, 1973); die Römerbriefvorlesung, WA 56, 1938; deren studentische Nachschrift WA 57I, 1939; Die Galaterbriefvorlesung, WA 57 II, 1939; die Hebräerbriefvorlesung WA 57 III, 1939.

神学研究全体に影響を与え、弁証法神学のルター研究においても、さらなる議論を促進した。とくにここで問題となったのは、ルターにおいて宗教改革的発見 (*die reformatorische Entdeckung*) がどこに起こったのか⁴⁹、また中世末期の伝統に対するルターの決別 (*Abgrenzung*) がどこに始まったのか、あるいはルターの教会論がどこに成立したのかというテーマであった⁵⁰。この問題は1960年以降、研究が大きく展開される分野であり、ここでは、その端緒が開かれたばかりであったが、この時期の弁証法神学のルター研究の中では、唯一歴史的視点が感じられるテーマである。

⁴⁹ Bornkamm, Heinrich, *Luthers Bericht über seine Entdeckung der iustitia dei*, ARG 37, 1940, S.117-128; ders., *Iustitia dei in der Scholastik und bei Luther*, ARG 39, 1942, S.1-46; Meissingner, Karl August, *Der katholische Luther*, 1952; Gyllenkrok, Axel, *Rechtfertigung und Heiligung in der frühen evangelischen Theologie Luthers*, 1952; Pohlmann, Hans, *Hat Luther Paulus entdeckt? : eine Frage zur theologischen Besinnung*, 1959.

⁵⁰ Grane, Leif, *Contra Gabrielem. Luthers Auseinandersetzung mit Gabriel Biel in der Disputatio Contra Scholasticam Theologiam 1517*, 1962.

Rupp, Gordon, *Luther and the Doctrine of the Church*, in: SJTh 9, 1956, S.384-392; Iwand, Hans Joachim, *Zur Entstehung von Luthers Kirchenbegriff*, in: *Festschrift für Günther Dehn*, (Hrsg.) Wilhelm Schneemelcher, 1957, S.145-166; Maurer, Wilhelm, *Kirche und Geschichte nach Luthers Dictata super Psalterium*, in: *Lutherforschung heute*, 1958, S.85-101; Müller, Gerhard, *Ekklesiologie und Kirchenkritik beim jungen Luther*, NZStH 7, 1965, S.100-128; Müller, Hans Martin, *Die Heilsgeschichte in der Theologie des jungen Luther*, Diss. 1956; Metzger, Günther, *Gelebter Glaube. Die Formierung reformatorischen Denkens in Luthers erster Psalmenvorlesung, dargestellt am Begriff des Affekts*, (FKDG Bd.14), 1964; Müller, Gerhard., *Die Einheit der Theologie des jungen Luther*, in: *Reformatio und Confessio. Festschrift für D. Wilhelm Maurer*, (Hrsg.) Friedrich Wilhelm Kantzenbach und Gerhard Müller, 1965, S.37-51; Hermann, R., *Das Verhältnis von Rechtfertigung und Gebet nach Luthers Auslegung von Römer 3 in der Römerbriefvorlesung*, in: *Gesammelte Studien zur Theologie Luthers und der Reformation*, 1960, S.11-43; Beintker, Horst, *Glaube und Handeln nach Luthers Verständnis des Römerbriefes*, Luj 1961, S.52-85; Pinomaa, Lennart, *Die Heiligen in Luthers Frühtheologie*, StTh 13, 1959, S.1-50; ders., *Luthers Weg zur Verwerfung des Heiligendienstes*, Luj 1962, S.35-43; Lohse, Bernhard, *Luthers Christologie im Ablassstreit*, Luj 1960, S.51-63, usw.

ルターの聖書釈義に関しては、とりわけルターのキリスト中心的な聖書解釈が指摘されることになった。ホルの弟子であるハインリヒ・ボルンカム (Heinrich Bornkamm)、カリン・ボルンカム (Karin Bornkamm) と共にゲルハルト・エーベリンク (Gerhard Ebeling) がこの問題の考察を進めた⁵¹。その一方、ルターをパウロ主義者と見るカトリックからの批判に対する取り組みも進められた。レーヴェニヒはルターを福音書の釈義家として示し⁵²、ホルの弟子パウル・アルトハウス (Paul Althaus) もパウロとルターの相違を指摘した⁵³。

いわゆる「二王国論 (die Zwei-Reiche-Lehre)」についての議論も盛んに行われた。これは政治的経験より始められ、バルトがドイツのルター派教会への批判を行ったことに刺激を受けたものであった。この議論は弁証法神学外の研究者も含めて数十年にわたって行われ、その中で一定の確認に至り、これが一般的に受け入れられるものとなった。すなわち、ルターの行った二つの国の区別 (Unterscheidung) は、その分離 (Scheidung) を意味するものではない、ということである。すなわち、ルターにおいては世俗的統治も神の法の下にあるものと理解されており、したがって「二王国論」はキリスト者に政治的責任を免除するものではない、とする結論が導き出されたのである (ハラルド、ディーム Harald Diem, エルンスト・キンダー Ernst Kinder, ア

⁵¹ Ebeling, Gerhard, *Evangelische Evangelienauslegung*, ¹1942, Neuausgabe 1962; ders., *Die Anfänge von Luthers Hermeneutik*, in: ZThK 48, 1951, S.172-230; Bornkamm, Heinrich, *Luther und das Alte Testament*, 1948; Bornkamm, Karin, *Luthers Auslegungen des Galaterbriefs von 1519 und 1531. Ein Vergleich*, 1963.

⁵² Loewenich, Walther von, *Luther und das johanneische Christentum (FGLP 7.R. Bd.4.)* 1935; ders., *Luther als Ausleger der Synoptiker (FGLP 10.R. Bd.5.)* 1954.

⁵³ Althaus, Paul: *Paulus und Luther über den Menschen*, 1937, 2.erw.Aufl. 1951.

ルトハウス, ヘルマン・ディーム Hermann Diem, ゴーガルテン, フランツ・ラウ Franz Lau, ヨハネス・ヘッケル Johannes Heckel, ハインリヒ・ボルンカム)⁵⁴。

これと関連して, ルターの国家理解についても問われることになった。ここでは, ルターの自然法理解より, 国家の問題が論じられた (ベルンハルト・ローゼ Bernhard Lohse, ブリアン・A・ジェリッシュ Brian A. Gerrish など)⁵⁵。またルターの学問研究と教化文学との関係についても研究が進められ, ルターにおける神学と信仰の密接な関係が明らかにされた (マウラー)⁵⁶。

このような研究が進められる中, そしてこれらの研究の成果を受けて, ルター神学についての概説が弁証法神学, そしてホル学派の側か

⁵⁴ Diem, Harald, *Luthers Lehre von den zwei Reichen, untersucht von seinem Verständnis der Bergpredigt her. Ein Beitrag zum Problem "Gesetz und Evangelium"*, 1938; Kinder, Ernst, *Geistliches und weltliches Regiment Gottes nach Luther. Schriftenreihe der Luthergesellschaft H.12*, 1940; Althaus, Paul, *Luther und das öffentliche Leben. Zeitwende 1946/47, H.2, S.129-142*; ders., *Luthers Lehre von den beiden Reichen im Feuer der Kritik, LuJ 1957, S.43-68*; Diem, Hermann, *Karl Barths Kritik am deutschen Christentum*, 1947; Gogarten, Friedrich, *Die Verkündigung Jesu Christ. Grundlagen und Aufgabe, とくに III.Buch: Luther, S.275-402*, 1948; ders., *Der Mensch zwischen Gott und Welt, とくに S.88-128*, 1952; Lau, Franz, *Luthers Lehre von den beiden Reichen, Luthertum H.8*, 1953; Heckel, Johannes, *Lex charitatis. Eine juristische Untersuchung über das Recht in der Theologie Martin Luthers*, 1953; ders., *Widerstand gegen die Obrigkeit? Pflicht und Recht zum Widerstand bei Martin Luther, Zeitwende 25*, 1954, S.156-168; ders., *Luthers Lehre von den zwei Regimenten. Fragen und Antworten zu der Schrift von Gunnar Hillerdal, Ztschr. für evang. Kirchenrecht 1955, Bd.4 H.3, S.253-265*; ders., *Kirche und Kirchenrecht nach der Zwei-Reiche-Lehre, ZSavRG, Kanonist. Abt. 48*, 1962, S.222-284; Bornkamm, Heinrich, *Luthers Lehre von den zwei Reichen im Zusammenhang seiner Theologie*, 1958.

⁵⁵ Lohse, Bernhard, *Ratio und Fides. Eine Untersuchung über die ratio in der Theologie Luthers*, 1958; Gerrish, Brian A., *Grace and Reason. A study in theology of Luther*, 1962.

⁵⁶ Maurer, Wilhelm, *Von der Freiheit eines Christenmenschen. Zwei Untersuchungen zu Luthers Reformationsschriften 1520/21*, 1949.

らも提出されることになる。ホルの弟子エリッヒ・ゼーベルク (Erich Seeberg) やヨハネス・フォン・ヴァルター (Johannes von Walter) は、ルター神学の組織神学的概要とそのダイナミクさを描きだし、またアルトハウス、そしてエーベリンク、レナルト・ピノマ (Lennart Pinomaa)、ゴーガルテン、ヘルマンらもこれに続いた⁵⁷。これらの研究はしかしながら、歴史批評の方法を意識してはいながらも、それぞれ自己の神学的立脚点に規定されてルター神学を解釈しており、それぞれが異なった様相を呈するものとなっている。すなわちゴーガルテンにおいては、初期弁証法神学がその基礎にあり、アルトハウスにおいては、彼の「原啓示」の理解がその研究を方向付け、エーベリンクにおいては近代精神に規定された解釈のあり方が見て取れる。その結果、これらの研究はルター神学の理解を混乱させる結果をもたらしたのである⁵⁸。上述の研究も含めて、これが特定の神学方向に依拠した研究の行きついたところであった。危機的な時代にあつて教会の革新に寄与したというその貢献は否定できないにせよ、そして特定のテー

⁵⁷ Seeberg, Erich, *Luthers Theologie. Motive und Ideen*. Bd.1: Die Gottesanschauung, 1929; Bd.2: Christus, Wirklichkeit und Urbild, 1937; ders., *Luthers Theologie in ihren Grundzügen*, 1940; Walter, Johannes von, *Die Theologie Luthers*, 1940; Althaus, Paul, *Die Theologie Martin Luthers*, 1962; Ebeling, Gerhard, *Luther, Einführung in sein Denken*, 1964; Pinomaa, Lennart, *Sieg des Glaubens. Grundlinien der Theologie Luthers*, bearbeitet und herausgegeben von Horst Beintker, 1964; Gogarten, Friedrich, *Luthers Theologie*, 1967; Hermann, Rudolf, *Luthers Theologie*, (Hrsg.) Horst Beintker, 1967.

⁵⁸ Loewenich, *Die Lutherforschung in Deutschland seit dem Zweiten Weltkrieg*, S.710; ders., *das Lutherbild in der gegenwärtigen Lutherforschung*, S.264-266; ders., *Lutherforschung in Deutschland*, S.155; Bizer, Ernst, *Neuere Darstellungen der Theologie Luthers*, ThR 31, 1966, S.316-349, ここでは S.348f.; Müller, *Protestantische Lutherforschung der Gegenwart*, S.259-261, 268f.; Lau, *Der Stand der Lutherforschung heute*, S.49-54; Lohse, Bernhard, *Die Lutherforschung im deutschen Sprachbereich seit 1966*, LuJ 38, 1971, S.91-120, ここでは S.94-96.

マについてはルター神学の理解を深めたという貢献もあったにせよ、これらの研究は結果的に、歴史研究の必要性を改めて考えさせる方向へとルター研究が転換してゆく契機を与えるものとなったのである。

4. おわりに

このように1960年代までのルター研究は、弁証法神学の影響の下、教会史家も組織神学者もルターの神学に集中し、その結果、ルターの生涯や宗教改革者としての歩みに関する歴史研究は1875年のユリウス・ケストリン（Julius Köstlin）の著作⁵⁹以来、手付かずの状況であった⁶⁰。しかもこれらの組織神学的研究は自己の神学的立場に規定されたあり方をもって多様な理解を提出し、その結果、ルター神学そのものの理解が困難となる状況がもたらされたのである。このような中で、歴史的、批判的視点をもってルターや宗教改革を研究することの必要性が、1950年代後半よりとくに教会史家たちにより主張され、方法的考察をも含めて、新たな研究のあり方が模索され、促進されることになった。それは、弁証法神学の登場によって後退させられたリッチェル、ハルナック、トレルチらの歴史意識の復活であり、歴史的方法の徹底化が試みられたのである⁶¹。もっとも、その後数十年にわた

⁵⁹ 1903年カウエラウによる改訂版：Julius Köstlin/Gustav Kawerau, Martin Luther. Sein Leben und seine Schriften, 2 Bde. ⁵1903.

⁶⁰ Loewenich, Die Lutherforschung in Deutschland seit dem Zweiten Weltkrieg, S.708-710; ders., Zehn Jahre Lutherforschung in Deutschland, in; ders., Von Augustin zu Luther, Witten 1959, S.307-378, ここでは S.318; Gerhard Müller, Protestantische Lutherforschung der Gegenwart, S.259.

⁶¹ これらの歴史研究の展開については、以下の拙論を参照：「『歴史的』ルター研究の提唱：ゲルハルト・エーベリンク」（『基督教研究』第71巻第1号 2009年6

る彼らの歴史研究は宗教改革の神学や運動の多様性を明るみに出し、その結果、宗教改革の本質が提示できなくなる中で、再び弁証的研究が復活の兆しを見せ始めるのである。

月, 101-112 頁); 「宗教改革研究における歴史的視点の導入—ベルント・メラ—」(『教会と神学』第 49 号, 2009 年 11 月, 103-140 頁); 「1960 年代から 1980 年代にかけてのルター研究—歴史研究の展開とその問題—」(『基督教研究』第 71 巻第 2 号 2009 年 12 月, 19-36 頁); 「ルター神学研究における歴史的視点の導入—ベルンハルト・ローゼ—」(『ヨーロッパ文化史研究』第 11 号, 2010 年 3 月, 217-244 頁)